

アコちゃんに悲しんでもらいたい女の子の話

アコ、俺たち結婚しよう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんやかんやあって箱舟占領戦に参加した結果死にそうになる女の子の話

巨大な乗り物（船）に乗って敵の本拠地につつ込む、目標は敵の拠点の爆破、自爆シークエンスを起動したら解除不能……これって誰か犠牲になるパターンでは？

と思っ書いてたやつです

※これはブルーアーカイブメインストーリーの最終編第3章までしか実装されていない時期に書いた小説ですので、今後のブルアカ本編のストーリーの進み次第で大きな違いが出る可能性があります

中編 前編

目次

15

1

前編

「これで最後ですね」

「はい、確かに受け取りました。これで手続きは全て終了ですね」

お世辞にも綺麗とは言えない学校の中で三人の少女が向かい合っていた。

「私は本校の方に戻りますがあなたはどうしますか？」

「わたしはもう少し校舎を回ってから行きます。どうせすぐ取り壊されちゃうから見納めの為に」

「そうですね。それなら改めまして……」

そして、三人の中の一人である水色の髪と瞳をした少女は微笑みながら……

「お疲れ様でした。ゲヘナ学園シエオル分校第七十二代目生徒会長さん」

そう口にした。

果たして自分が死んだら周りの人間は悲しむのか。今日も今日とてその答えを探す為に頭を働かせる。直接聞いてもいいが口ではどうとでも言えるので得策ではない気がする。

「…どうかしましたか？」

「いえ、少し考え事を」

現れた。

私の知り合い第1号、その名も天雨アコ。

青い髪と青い瞳、黒と赤のリボン、髪を耳にかけていることで周りからも見えるピアス。更にはカウベル、手枷、太もも………それから何故か凄いことになっている横乳。後半から明らかに分かる事だが、この女は間違いなくMである。

「全く……すっかりしてください、情報部部长」

『ゲヘナ学園情報部部长』、それがゲヘナ学園二年生の私の役職だ。

「——以上が今回の報告になります。主にトリニテイに関連すること、それから連邦生徒会の生徒会長が失踪したことにしても調べましたがそちらの方は……」

「分かりました。それではこちらは私からヒナ委員長の方に渡しておきます」

何とかして彼女を……いや、情報部部长という立場を最大限に利用して潜入したミレニウムやトリニテイといった他学園の自治区で獲得してきた全ての友人に私が死んだら悲しんでもらいたい。

ちなみに仕事上の友人（情報源）ではなくバレたら風紀委員からも怒られる方法で潜入して出来た個人的な友人達だ。

「はは……まさか、こんなにバツチリなシチュエーションになるとはなあ……」

ここ「アトラ・ハシースの箱舟」は、キヴオトス史上最大の危機とまで言われた「虚妄のサンクトウム」を出した元凶となる箱舟……と
言うよりかは空中要塞をイメージさせる場所になる。

何故そんな所に来ているのかと聞かれれば、細かく話すとかなり長くなるため要約すると、ゲヘナの守備には既に十分な戦力がいたため、私は敵の本拠地に攻め込む係になった。

「これは……もう、無理かなあ」

途中までは箱舟の占領も順調だった。そう、途中までは。

箱舟の占領も終盤に差し掛かったところで、箱舟のリソースの大半を注ぎ込んで作られた強大な敵の足を止めるために私は一人で戦った。他の皆は、私達の本拠地である「ウトナピシユタイムの本船」の防衛、囚われた生徒の救出、その他諸々の仕事があった為仕方ない。

「あー…誰かしら悲しんでくれるかなあ……」

どうせなら『死んだと思わせておいて悲しんでるのを確認してから実は生きてました』みたいなパターンが一番いいと思ってたが、まあ、それはもう無理なので諦めるとしよう。

「仕方ないから…想像で補つとくか」

エンドルフィンがドバドバ出てるからか痛みは感じないが、見える限りでも身体中切創と銃創だらけな上に、液体だか固体だかよく分からない性質の腕に何ヶ所も貫かれた。他にも戦闘中に受けた攻撃やその重さから推測するに多分骨も何本か折れてるし内臓も酷いことになってると思う。…今気付いたけど視界も悪いから片目もやられてるかな。……我が事ながらなんでこれだけやられてまだ生きてるんだろう。

「あっ」

前の道が崩れた。それに後ろの道もちよつと前に崩れたような音

が聞こえた。大人しく本船に戻ることは諦めて足を止めたところで、耳元で甲高い音が鳴ってることに気付いた。

「そういえば……インカム付けてたんだっけ？忘れてた」

インカムは左耳に着けているが、身体が倒れないように左手を壁に添えながら歩いていたので右手でインカムをオンにする。

「もしもし」

『繋がりました！発信位置の特定急いでください!!』

『マドカさん！あなた今どこにいるんですか!?戦闘中にモニターは切れるし通信も繋がらなくなるので……!』

同じ学園の風紀委員会の行政官を務める一つ年上の先輩の声が聞こえてくる。

マドカ……赤詩マドカ。それが私の名前だ。

「らしくないなあ。アコ先輩、私にはもつと冷たかったでしょ?」

『なんでっこんな時に!とにかくどこにいるんですか!?箱舟の崩壊が始まってるんです!すぐに戻ってください!』

「それは…ちよつと厳しいですね」

『なんで!動けないんですか!?それなら迎えに』

「いや、そういう問題じゃなくて」

そこで、数学に関しては知り合いの中でも指折りの友人の声が聞こえてきた。

『回線復帰、モニターに回します!』

「ちよつどいいや。アコ先輩も見てもらえば分かると思います」

インカムの向こうでキーボードを叩く音が聞こえ、その間はお互い

に沈黙……その数瞬の後に息を呑む音が聞こえてきた。

『っ！その傷……！』

『発信地の特定完了しました！外郭2区の中央部です！』

『マドカ！すぐに向かうから待ってて！』

「無理ですよ、先生。私の通った道、前も後ろももう崩れ始めてるんです。それに船からここまで来て私を連れて戻る間、船はどうするんですか？」

『それは……』

「まさかとは思いますが『停めておく』なんて言いませんよね？それこそ完全に爆発に巻き込まれて私以外の皆さんも死にますよ。もしかして先生は一人の生徒のために他の全員を殺すつもりですか？」

こう言えばこの人は絶対にこちらに來れない。我ながら卑怯だとは思う。

先生——そう呼ばれる男性は、このキヴオトスでもかなり特殊な立場の人間だ。

連邦捜査部シャーレが設立された直後、情報部の仕事でゲヘナの一般生徒に化けてシャーレに入部（という名の潜入）をしたため、この人との関係もそこそこ長い。

何よりもこの人を説明する上で欠かせないのは、どこの学園でもBDを使って学習するので、「職員」や「教授」というのならまだしも「先生」という生徒を教え導く立場の人間は非常に珍しいということだ。

その上、生徒の危機となったら躊躇無く命を賭けてでも問題を解決しようとするので、その姿勢に惚れた生徒も少なくない。かく言う私の知り合いにもそういう人はいっぱいいる。

「時間がありませんから早めに済ませますね。エンジン立ち上がりさせながらでいいんで聞いてください」

『済ませるって……何を……』

「とりあえず……連邦生徒会の皆さんから。今までもかなり忙しかった

と思いますが「虚妄のサンクトウム」攻略戦、「アトラ・ハシースの箱舟」占領戦の二つを終え、更に忙しくなるとは思います。ですが頑張ってくださいね」

『『……』』

次……声が出なくなる前に終わらせないと。

「ヒマリさんは……多分言わなくても分かっていますよね？」

『ええ、あの事は誰にも言いません』

ヒマリさんは本当にやばい。少し話ただけで私が何を考えてるのかバレた。もうハツカーとかやめて探偵目指したらどうだろうか。綺麗だし安楽椅子探偵とか似合うと思うんだ。

「ユウカ……は、うん、とにかく肩に力を入れすぎないように。まあ、そんなことを言いながらも優しいのがユウカの魅力でもあるんだけど何事も程々に、ね？」

『待って、本当にもう手段がないの？今から急いで船を動かしてそっちに寄せて迎えに行ったり……』

ユウカともシャーレ設立初期からの仲でだいぶ古い知り合いになる。一番最初は……そう、不良に占領されたシャーレの部室を取り戻すところだったかな。

「そんなことしてる時間があつたらみんな爆発に巻き込まれちゃうよ」

『もうどうしようもない』、そう思って笑いながらユウカの言葉を否定する。

「ゲーム開発部の皆さん。言ってませんでしたけど、実は私、テイル

ズ・サガ・クロニクルシリーズのファンだったんですよ。だから画面越しでもお話できるってなった時は本当に嬉しかったんですよ」

『マドカさん…?』

『マドカ、一体何を』

「三作目がリリースされたらお供えしておいてくれると嬉しいです」

『待って…待ってよ!マドカさん急にどうしちゃったの?そんな…いきなり…!』

『お姉ちゃん…』

「次は…つとと」

今までで一際大きい爆発の衝撃で足元が揺れる。

何とか倒れないようにバランスを取ろうとしたが、どうやら自分で思っているよりも弱っているらしくその場に倒れ込んでしまった。何とか身体を起こして壁にもたれて座る。

「ハナコさん。補習授業部では声だけの参加でしたから次の水着パーティがあつたらちゃんど参加するって言いましたけど守れそうにありません。本当にごめんなさい」

『待って…待ってください!』

「ヒフミさんとアズサさんには『ももフレンズの映画見に行く約束を守れなくてごめん』、コハルさんには『勉強教える約束を守れなくてごめん』と伝えておいてください」

『マドカちゃん!お願いですから…本当に…本当に……待って…!!私…補習授業部の皆になんて言えば…!』

申し訳ないがそこは自分で考えてとしか言えない。できることならもう少し話していたかったが、時間が無いので次に行く。

「いっほっ…」

口から出た血をまだ比較的綺麗な袖で拭いながら、なんとか声を出

す。

「美食研究会の皆さん、ゴールドマグロの情報があなた達に回らないように根回ししてたのに休日に情報部の壁破ってゴールドマグロ関連の書類だけ全部持ったのは忘れてないからね……でも好きな事に熱中できるのはいい事だと思いますよ」

『はい』

珍しいなこの人達がここまで静かになるなんて。

「フウカは風紀委員長に言えば多分それなりに便宜を図ってくれると思うから適度に人を頼ること。世話焼きなものいいけどずっと一人でやってたら疲れちゃうからね」

『……………な……………ま……………』

「ごめんなさい、電波が悪いのかよく聞こえなくて……元に戻るまで待つには時間が足りないなのでこのまま進めちゃいますね」

給食部の方は私も手伝ったことがあるが、本当にやばい。風紀委員長が言ってた「このままだとゲヘナの給食はおにぎりだけになる」は冗談じゃなかった。

そうこうしている間にも箱舟の揺れは酷くなってきてるし、小規模だが連続した爆発音も聞こえてきた。

「次はカヨコ先輩ですね。ああ見えて私も便利屋稼業、結構楽しんでたんですよ。多分……自分の立場を忘れて楽しめたのは便利屋が一番だと思います。社長達にも……ごめんなさいって伝えておいてください」

『……………う……………』

ほとんど聞こえないが微かに聞こえた感じ声が沈んでる。どうやらカヨコ先輩はもう無理だと完全に悟ったのだと思う。普段はかな

り落ち着いてるのに声だけで気分が分かるくらいには私達の関係も深かったらしい。

「アビドスの皆さん、多分私がシャーレの生徒として正式に活動したのは皆さんの所に行くのが初めてだったんですよ。皆さんの所では色々と濃い時間を過ごさせていただきました」

数年前に風紀委員会からも要注意人物として警戒されていた人物との接触、6と書かれたビニール袋を被せられて銀行強盗に加担したり：ああ、あとは便利屋にバレたらやばいからビニール袋を被ったままサンングラスかけたりもしてたし……ろくな思い出無いな。

「アコ先輩には分校時代からお世話になってましたね。シェオル分校の生徒会長になったばかりで右も左も分からなかった私に事務仕事のいろはを教えてくれたアコ先輩とヒナ先輩には本当に頭が上がりません。ヒナ先輩にも『今までお世話になりました』と伝えておいてください。

それから次の部……ああ、他に言いたいことは寮の私の部屋の机の上から二段目の引き出しの中に入っていますからヒナ先輩と読んでください。鍵は……本棚の一番上の段の小説にしおり代わりに挟んでありますので」

そこで完全に音が聞こえなくなった。そっか、電波の調子が悪かったんじゃないかって私の耳が聞こえなくなっただけだったんだ。向こうとの通信は続いているかも分からないがそれでもこれだけは言っておかなければ後悔しそうなので言っておく。

「最後に先生とシロコさん、二人の事だから『私が連れてきたせいで』とか『私が連れ去られたせいで』とか思っただけですけど違いますからね？これは私の選択です」

そうだ。ゲヘナの分校に入ったのも、そこで生徒会長になったのも、星のような人に憧れたのも……全部全部、私が自分自身で決めたんだ。

「だから……どうか気に病まないでください。むしろ私はこんな形で死ぬるのなら本望ですから。でも……どうか皆さんは生きてください。以上、これで終わります」

気付いたら足は既に動かず、手もインカムに触れて電源を落とすことすら叶わない。

そこで一息着いた所で先程よりも大きい揺れが襲ってきた。

「こんだけ揺れれば………はあ、もう行ったかな」

星を、見つけた。

赤い星。青い星。

—— 大きい星。小さい星。

—— 大きさ、色は様々だが、それらは一貫して

—— 幼い頃に見た、彼方の空に光り輝く星のような

—— 夜が明けて消え去っても、人々の心の中に残って輝
き続ける。

—— そんな星だった。

—— だから、死して尚も忘れられること無く心の中に残り続けるあの人達に憧れた。

—— 私は、あの時の星やあの人達のように皆の心の中に残れただろうか。

—— 私は、あの人達のような誰かにとっての星になれた
だろうか。

その答えは最早分らない。

やり残したことはたくさんある。

「でも後悔はない」

そうだ。後悔なんかこれっぽっちもない。

……………それでも

「……………それでも……………もう少しだけ…皆と生きたかったなあ……………」

口に出さずにはいられない。だって、「誰かにとつての星になる」以外で初めて私が心の底から願った事だから。

ゆっくりと視界がぼやけてくる中、気力を振り絞って瓦礫の隙間から差し込んできた一筋の光に向けて手を伸ばす。その光はあの日見た星のようで……

「……ずっと……そこに……いたんだ……せん……ぱ……」

『……ずっと……そこに……いたんだ……せん……ぱ……』

ギリギリ生きていた回路を使用した通信が、そこで完全に途切れた。

最後に映つたのは、彼女が今は亡き人を呼びながら空に向かって伸ばした手が力無く落ちる所と、彼女の黝いハイローが消える所だった。

「……あ……」

消え入るような声が出たのはどこからだろう。

シャーレの先生？

セミナーの会計担当？

最も責任を感じてるであろうアビドスの狼？

一人の人間としてその命を懸けてまで勤めを果たそうとした少女？

様々なことに嫌気が差したところを同じ部活の仲間達に救われた少女？

それともこの中では彼女との付き合いが最も長かった風紀委員会の行政官？

誰であろうと言えることはただ一つ。ここで誰か一人でも叫んでいれば間違いなく全員が折れていたという事だけだ。

「……………先生、指示を」

「……………アコ？」

風紀委員会の行政官——天雨アコが指示を仰いだ。

「彼女は…マドカは私たちに『生きて』と言いました。なら、私達はそれに応えなければいけません。そしてこれ以上にここに留まることは本格的に危険です。……………だから…先生、指示を」

目に涙を浮かべながらもそう言ったアコを見てから先生はブリッジに集う生徒を見渡す。生徒達のその瞳からは涙と決意に満ちている事が確認できた。

(皆まだ折れていない……………なら……………)

「ウトナピシユティムの本船」……………発進！」

そして、シャーレの面々を乗せた船は、崩壊していく「アトラ・ハシースの箱舟」を後にした。

(ヒマリ、本当に言わなくて良かったの?)

(いいんですよ。それもこれも全てスタンスを変えようとしないう彼女が悪かったんですから。後でこってり絞られればいいんです)

中編

ミレニアム自治区内の中でも一際大きく、キヴォトスでも有数の設備を誇る大病院のガラスで仕切られた個室の中で、様々な医療用の機器を身体に繋がれたまま彼女は眠っていた。

「ヒマリ部長：それにヒナさんも」

「マドカの容態は？」

「今もまだ注意は必要ですがそれなりに安定はしてきたようです」
「そう…」

マドカを地上に転送したヒマリ

ヒマリから事前に連絡を受け転送されたマドカを迅速にこの病院に送る手筈を地上で整えたノア

ゲヘナ内部からマドカの学籍を細工してこの状況をバレないようにしているヒナ

この三人の目標は皆同じであるが、とにもかくにもマドカが回復しないことにはどうにも出来ない状況だった。

懐かしい夢を見た。

『それじゃあ私たちは行ってくるから：留守の間よろしくね』

まだ一年生だった頃、明らかに罨だと分かる場所に先輩たちは突っ込んで行った。：「自分たちの居場所を守るため」、ただそれだけの理由で。

『待つてください、先輩！わたし…わたしは!!』

何も出来なかった。

先輩たちの使っていた銃がボロボロになって発見された頃には：もう…。

なんとか頑張ってみたけど、十年以上に渡る負債を一人で返し切れるはずもなく、先輩たちの「居場所を守るため」という目標も結局達成できず、分校は廃校になってわたしもゲヘナ学園の本校へと転校になった。

幸運だったのは、ずっと少人数だったせいで半強制的に戦闘に参加していたから腕っ節にはそれなりに自信があったことと、分校のときから万魔殿に仕事を押し付けられたのがきつかけとはいえ、ずっと気にかけてくれたヒナ先輩とアコ先輩がいたこと。

………そして、分校の時の『わたし』を知るのがこの二人しかいなかったことと『わたし』にはそれなりに演技力があつたこと。

先輩たちの口から最後に聞いた意志を継げなかったのが悲しくて悔しくて申し訳なくて不甲斐なくて嫌いで…二度と顔を合わせられないと思つて――

――そんな自分を殺してやりたかつた。

だから、一人の形見のカーデイガンを制服の上から身にまとつた。髪を伸ばしてもう一人の形見のヘアピンもつけた。

もうあの人たちの意志を守れなかつた『わたし』は死んだ。今ここにいるのは全く別の…あの人たちのように光ることができるような『私』だ。

ふと、目が覚めた。

朧気な意識のままに目だけ動かして周りを見渡してみる。

白いシーツがかかっているベッド、腕に巻いているリストバンドに、身に着けている病衣。口に着いている酸素マスクのようなもの。つまり、病院だった。

…どれだけたった？

…箱舟は？

…虚妄のサンクトウムは？

…私の銃は？

…そもそもここどこ？

頭の中をいくつかの疑問が駆け巡る。

声が出ない上に体も動かせない。

はてさてどうしたものかと思ったら、横から声をかけられた。

「おや…おはようございます。よく眠れましたか？」

そこには妙に怖い雰囲気をもとつたヒマリさんがいた。

私が目を覚ましてから一週間。あれからお見舞いに来たのはヒナ先輩とノアさんだけ。ヘイローのおかげか怪我の治りも早く、もう歩けるくらいには回復した。

「箱舟攻略作戦から二週間、マドカさんが目を覚ましてから一週間が経ちました」

「それなりに落ち着いてきたので今日は現状の説明をしよう、ということになったんですけど……」

「こういう時は端的に言った方がいい。はっきり言うけど、今のシャーレは

———お葬式ムード」

たつぷりと溜めたヒナ先輩の言葉に、一抹の喜びを覚えた。

これは来てる。かなり来てる！

あとはこの三人に頼み込んでミレニアムの転入生あたりの身分をもらってからもう一度シャーレに入って……いけるぞこれ！

「……まあそれでいいかもしれませんね」

「とにかく一度自分の目で確かめてもらいましょう」

そんなことを言っていたのが少々気になったが、それから更に数日。もうとつくに杖もなしで歩けるようにもなった。

黒いスカート、白いシャツを着て水色のネクタイを身につけ、その上から少し大きめのジャケットというミレニアムの一般生と同じ制服姿でシャーレの前で立ち止まる。

ゲートでスマートフォンをタッチして許可が出たことを確認してからシャーレの建物に入る。銃は、かつて使っていたのと同じ物を持つてくる訳にもいかなかったので適当にそこら辺で買ったオートマチックのハンドガンをガンラックに置いてからエレベーターに乗り込む。

やがて、音を立ててエレベーターが止まり、シャーレのオフィスへの扉が開いた。

目の前には今日の当番の一人……ヒフミさんがいる。

ヘアピンとカーディガンはもう着れないくらいに壊れてしまったので仕方がないが新調した。ヘイローは、まあ……ヒナ先輩みたいな特徴的な形なら即バレするだろうが私のは街中を探せばそこら辺に居そうな幾何学模様。髪も染めて伊達メガネもかけたので私が『赤詩マドカ』だとバレることはないだろう。

「初めまして！ミレニアムサイエンススクール二年生『青詠^{あおなが} マドハ』と言います！」

そう告げた私に対しての返答は……

「あ……あれ……なんで……止まって……」

ヒフミさんの涙だった。

そう、これだよこれ！私が求めていたものはここにあった！

「ご、ごめんなさつ……」

「大丈夫……大丈夫ですよ。待ちますから」

ヒフミさんが泣き止むまで背中をさすって待つ。

「あはは……ごめんなさい、急に」

「いえいえ。何があったのかは存じませんが誰にだって泣きたくなる

ときくらいありますから」

「そう言ってもらえると……それでは先生のところにご案内しますね」

「はい、お願いしますー！」